SHIMANE University

島根大学広報誌

しまだい

shimadai

広報しまだい

2016.10
vol.30

特集1

人に焦点をあてた地域貢献
新設「人間科学部」来春始動

特集2

学長スペシャル対談　海士町長 山内道雄 氏

大学と地域の連携を通して
地域活性化を担う人材育成

学生が伝えるしまだいの魅力

島根大学オープンキャンパス2016開催

特集 01

地域創生へさらなる改革の推進 39年ぶり！新設「人間科学部」来春スタート

9月2日に行われた記者会見の様子。会見の詳しい内容は、P21をご覧ください。

地域活性の中核として、地域の創生に貢献することを最も重要な使命とする本学は、さらなる機能強化を図ります。

改革の中心は、平成29年4月から39年ぶりの新学部である「人間科学部」を誕生させることです。人間科学部は、本学6番目の学部として、人間に焦点をあて、アプローチすることで、少子高齢化など地域の様々な課題に取り組む人材を育成していきます。

学部の特色は？

人間科学部では、人間を"こころの面"、"からだの面"、"社会的側面"から多角的にとらえる力を身に付け、専門分野を深めるようカリキュラムを組んでいます。そして、1年次から卒業年次まで、地域の現場で、直接的に見て感じて学びます。また、仮説検証する力や理論化・体系化する

[特集3]
<COC/COC+事業レポート>
協働・創造・地域をキーワードに
学びを拓く新しい初年次教育はじまる… 07
◎世界へ広がる 世界とつながる（国際交流紹介）…… 09
◎島根大学の研究・地域貢献事業紹介
①法文学部 舩杉 力修 准教授 …… 11
②医学部 松崎 有未 教授 …… 13
③生物資源科学部 泉 洋平 准教授…… 15
◎オープンキャンパスレポート …… 17
◎しまだい×島根のまち（自治体紹介）…… 19
◎しまだい便り …… 21
◎しまだい Active（学生活動紹介）…… 23
◎しまだい's サークル（サークル紹介）…… 25
◎島根スサノオマジック活動紹介
島根大学支援基金寄附者一覧
読者プレゼント …… 26

表紙／海士町での対談の際の山内町長と服部学長

少子高齢化の進む地域において、人に焦点をあて、地域コミュニティをささえる人材の育成

－学部の特色－

人間科学部の詳しい内容はコチラ

人間を心理的・身体的・社会的側面から多角的に捉える力

各コースが独立しつつ、互いに融合してカリキュラムを構成します。

地域実践と科学的思考を往還させる力

1年生から地域の現場で直接見て、感じて、学びます。

他領域の人々と連携する力

地域実践や研究を発表しあう授業を設けます。

人間の特性を深く理解し、
人々がその人らしく生きることができる社会を実現していく人材を育成

力を身につける科目も充実させ、理論と実践を往還して学ぶとともに、学生が互いに地域実践や研究について話し合う授業も設けることにより、様々な領域の人と連携して問題に取り組む力を持った人材を育成していきます。

心理学、福祉社会、身体活動・健康科学 三つのコースの特徴は？

人間科学部では、専門性の高い学びの場とするため、三つのコースを設けています。

心理学コースでは、人の心・行動の仕組みや働きについて、臨床心理・実験心理の知見から、実践的かつ科学的に学びます。

福祉社会コースでは、社会福祉学の理論や技術を学び、「人をささえる」という視点から、社会が抱える問題について考える力を養います。

身体活動・健康科学コースでは、健康科学や運動機能などを学び、地域住民とともに健康課題の解決を進めるための知識・技術・実践力を養います。

島根大学広報誌
しまだい
shimadai
2016.10
vol.30

[特集1]
新設「人間科学部」始動 …… 01
[特集2]
<学長対談>
海士町長 山内 道雄 氏 …… 03

特集02　学長対談

海士町長 山内道雄 × 島根大学 学長 服部泰直

Yamauchi Michio

Hattori Yasunao

大学と地域の連携で地域活性化を担う人材育成を目指す

平成14年、町長に就任以来、「攻め」の姿勢と数々のアイディアで島（海士町）に活力を注入し続ける、山内道雄町長。

平成26年には、その海士町をはじめとした、隠岐島前三町村と島根大学との間で、人材育成などを目的とした包括的連携協定を締結。また今年度からは、同町をはじめとする島根県自治体の実績と、大学の教育資源を組み合わせた教育プログラム化を行い、全国各地で教育を核とした地域活性化を志す社会人を受け入れる1年間の人材養成コース「ふるさと魅力化フロンティア養成コース」がスタート。両者間の交流がさらに深まろうとする中で、今回の対談が実現しました。

“金がない制度がない例がない。
だからできない。”は言わない。

山内 道雄

1938年生まれ。島根県立益田高等学校卒業。1995年に海士町議会に初当選し、町長としては2002年に初当選。その後も町長職を続け、現在4期目を迎えている。

大学と自治体 それぞれが担う役割

服部学長（以下学長）　本日はお忙しい中、ありがとうございます。早速ですが、地域活性化において顕著な業績を残していらっしゃる海士町との連携は、先の包括協定はもちろん、本学の「ふるさと魅力化フロンティア養成コース」開講において、大変心強く思っています。なかでも、島前高校の「高校魅力化プロジェクト」は、同じ教育機関である本学として、また先行する取り組みとしても、大変興味のあるところです。まずはプロジェクトを率いる山内町長の教育に対する思いをお聞かせください。

山内町長（以下町長）　平成16年から、主に40代までの若い世代のIターン者を多く受け入れて来ましたが、そこで共通しているのが、高学歴であったり大企業、有名企業に勤めていた経験があったりなど、社会人としての高いスキルを持つ方が多いことです。Iターンの理由も、「自分たちは仕事を探しに来たのではなく、作りに来た」と言うのです。つまり志を抱いて海士町にやって来るわけです。そういう話を聞くうち、彼らを駆り立てている源が、「教育」にあると確信したのです。

　ところが自分の足元を見たら、島前高校の生徒数が激減して廃校の危機が迫って来ていた（当時）。廃校になれば、子どもたちは本土の学校に行かなければなりません。しかし仕送りを賄うには、親の（町内の）収入では心許ない。子どもの人数分の費用が必要なわけです。「学校をなんとかしなければ！」と同時にこの心配が大きかった。

学長　教育に係る費用の負担を軽減するため家族全員で島を出て行く状況も考えられると。

町長　そういうことです。このままでは自立への取り組みが水泡に帰す。そういう心配です。そこでまず、島前の町村と島前高校が連携し、三町村内だけでなく、全国からも生徒が集まる魅力と活力ある高校づくりを考えました。

服部 泰直

1956年生まれ。1993年4月島根大学理学部助教授、1995年6月島根大学理学部教授、同年10月島根大学総合理工学部教授、2011年10月島根大学総合理工学部長、2012年4月島根大学大学院総合理工学研究科長、2015年4月島根大学学長。趣味はサッカーで、国体出場経験もあり。

学生から
“また島根に戻って来ます”と
言ってもらえる教育がしたい。

教員数の確保はもちろん、国公立大学への進学に対応する特別進学コースと、地域の担い手を育成する地域創造コースの二つのカリキュラム編成。高校と地域を連携するコーディネーターの支援体制の充実など、次々に実行してきました。おかげで生徒数も増加し、現在、全国の24都道府県から学生が来ている状態です。

学長　進学と地域の二コース編成という部分に、先に町長がおっしゃっていた「教育」の大切さを痛感します。

町長　島外からの子どもたちは、自然が好きだからとか、環境を変えたいというより、自らの強い自立心を持って来ています。そういう子どもたちのやる気に応えるため、高校と連携した公立塾「隠岐國学習センター」も作りましたが、単に偏差値を上げるためではなく、「グローカル人材」の育成が大きな目的なんですね。ここから巣立った子どもたちが、将来海士町に戻ってきて頑張ってくれるような人材に育ってもらいたい。実際に子どもたちも「いつか戻って来る」と言ってくれます。そういう意味でも、地域に優秀な人材を送り込もうとする「ふるさと魅力化フロンティア養成コース」には大きな期待を寄せています。

学長　ありがとうございます。本養成コースに関しては、はっきりとした問題意識を持っている社会人の方々が受講生なので、効率的ではありますが、問題なのは、自分たちの地元に帰った後、何をするのか？という部分です。町長もおっしゃっていますが、地域活性化において、人のつながりは大きい。海士町には自立を可能にする力やアイディアがあったと思いますが、それを実行する人、またそこから新しいアイディアを出してくる人がいて、またそれを実行する人がいる。幸いにも海士町には優秀な人たちが集まり、このネットワークが形成されていったと思うのですが、それはやっぱり人から人につながったために可能になったことだと思います。本養成コースでは、この海士町の成功例をしっかりと生かす。そのためにはや

はり人づくり。本学としては、そのためのお役に少しでも立てればと考えています。

人が要の地域活性化

学長　（前述の内容を受けて）町長に質問なのですが、海士町にやって来たIターン者は、日本全国様々な地域がある中、なぜ海士町を選んだのでしょう？今なら海士町の取り組みは有名なので、具体的な意志を持って来られる人がいるのは理解できますが、やはり最初ですね。海士町に優秀な人材が集まってきた、その端緒が知りたいですね。

町長　皆さんいきなり海士町にやって来たわけではなく、例えば学生時代に交流事業で来ていたり、電話等で問い合わせがあった場合は、「とりあえず一回来島してみてください」と丁寧に対応しています。そういう人たちは、元から地方で活躍したいと考えていますから、こういう最初の出会いでグッと交流が深まるんですよ（笑）。

学長　なるほど、結局は「人」なんですね！　海士町人気の秘密が垣間見えた気がします（笑）。

町長　うちでは例えば、補助金が出たから何かやらないか？というような、従来型の行政アプローチはしません。制度の有無関係なく、何かをやりたいという強い意志があるチャレンジは絶対に応援しようと。地域で活躍したい人のステージづくりのお手伝いが行政の役割だと思っています。

　我々の禁句は「金がない制度がない例がない。だからできない」これを絶対に言わない。なければ国に掛け合ってくることまでやってます。そういう姿勢であるから、「海士町に来たら自分がチャレンジできる感じがする」と皆さんおっしゃるんですよね。優秀な人材が来てくれる背景には、そういう面もあるかも知れません。

学長　海士町の取り組みを見ていると、ある意味で島根県が日本の最先端じゃないかと思います。島前高校の生徒たちも将来は海士町を含む島前地域に戻ってきたいという気持ちを持っている。

　それと同じ事を島根大学もしなくてはと思うのです。言ってみれば、本学も四分の三は他県からの入学者なわけですから、島前高校と立場は似ています。高校と大学の違いはあるにせよ、多くの学生が「また島根に戻って来ます」という気持ちを持ってもらえるような教育をしなくてはいけないと感じます。そのためにも学生たちに地域というものをしっかり認識してもらいたい。海士町さんや島前高校のように、本学でも、島根の各地で貢献してくれる人材の育成を目指します。

　そのような意味でも、海士町の自治体としての取り組み。島前高校の教育機関としての取り組み。両方が島根大学にとって大きな参考になりますし、参考にしていかなければと思っています。本日はどうもありがとうございました。

海士町紹介

海士町ってどんなところ？

島根半島沖約60kmに浮かぶ、1島1町の小さな島（面積33.46㎢／周囲89.1km）で、隠岐諸島の中の1つ、中ノ島のことを『海士町』と呼びます。対馬暖流の影響を受けた豊かな海と、名水百選（天川の水）に選ばれた豊富な湧水に恵まれ、自給自足のできる半農半漁の島として、観光から移住まで、島外から多くの人が訪れます。島根大学とのつながりは、各学部間でのもののほか、ふるさと魅力化フロンティア養成コースの取組みの一環として、隠岐島前高校での実習や、隠岐島前3町村で包括連携協定を結ぶなど、幅広い交流が続けられています。

協働・創造・地域をキーワードに学びを拓く新しい初年次教育はじまる

オールしまねCOC+事業では、新入生全員が地域との接点をもち、大学の学びへと円滑に移行するための初年次教育(地域志向型初年次教育)を推進しています。その取り組みのひとつとして、今年度前期に実施した教養育成科目の「スタートアップセミナー」(以下スタセミ)についてご紹介します。

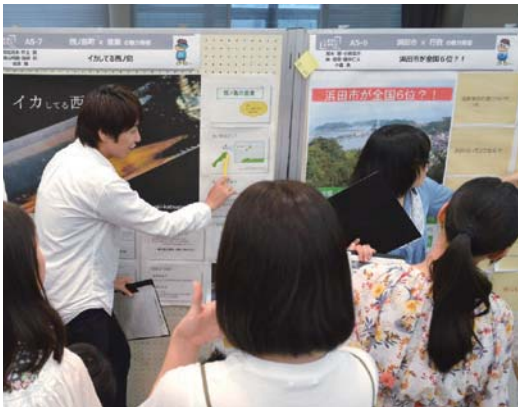
仲間と共に地域の魅力をPR

平成28年度のスタセミは、全学部から470名が受講し、9クラス・96チーム(各5名程度)に分かれて行われました。授業では、各チームにひとつずつテーマが割振られ、島根県内19自治体を対象に、「行政」「医療・福祉」「産業」「教育・子育て」「自然・科学」という5分野の魅力を発信する「島根県自治体魅力発信プロジェクト」に取り組みました。

プロジェクトは、「協働」「創造」「地域」という三つの学びから設計されており、受講生は、『作業を通して志向性の異なる他者を尊重し、建設的に議論をすすめ、協働すること』、『必要な資料を適切に収集し効果的な成果物を作成すること』、『地域に対する志向や視座を養うこと』という、大学での学びの基礎となる知識や技術、志向を身に付けます。

受講生たちは毎回の授業で提示されるスキルを身に付けながら、授業以外の時間も使ってテーマに取り組み、最終的には魅力をPRするためのポスターと説明資料を作成し、合同発表会を行いました。

発表会は2回行われ、7月11日(月)の第一回には6クラス66チームが参加しました(写真)。各チームはパネルにポスターと説明資料を貼り、5分間の発表を7回繰り返します。毎回異なるメンバーが発表をし、残りは他チームの発表を聞き、項目に従って評価しました。学生たちは発表と評価それぞれに真剣に取り組んでいました。



文部科学省 地(知)の拠点 しまだいCOC

文部科学省 地(知)の拠点 オールしまねCOC+

VOICE

スタセミ受講学生に聞きました！

Q 全15回の講義を終え身に付いたことは？

A 県内外出身者が入り混じる中で、一緒に島根について調べることは、今まで気にしていなかった地域に目が向き、新たな魅力を見つけたり、改めて島根を考えたりという意味でも貴重でした。また、他者と連携して何かを成し遂げようとすることは本当に難しく、チーム内で自分はどう動けばスムーズに作業ができるのか、逆に人にはどうしてもらえば良いのかなど、他者との協働を学ぶ良いきっかけになりました。

Q 発表会を振り返って

A まず、発表会のための説明資料とポスターを作っていく作業が思いのほか大変でした。地域の魅力を見つけるために、どう情報収集を行えば良いのか、説明のために情報をどう組み立てるのか、魅力をポスターで表現するにはどうデザインしたら良いかなど、これまでにない知識や技術が必要でした。いざ発表となっても、地域の魅力を相手に理解してもらうにはどのように伝えたら良いか悩みました。実際に発表した後、他チームの発表を聞くと、伝え方が上手い人はどこが違うかに気付くことができました。また、相手の話をしっかりと聞く姿勢や方法についても学ぶことができたので良かったです。

Q スタセミでの学びを今後どう生かしたい？

A 今回のスタセミで学んだ情報収集方法、資料作成方法、デザインやプレゼンテーションは、これからの講義やゼミでの学修に役立つと思います。また、良いチームを作るとはどういうことか、ということも学びました。メンバーと積極的に交流し、建設的な議論をすることは難しかったですが、それらを通じて、個人ではできないような成果を生むことができました。他の人と協働することは、大学生活だけでなく社会人になってからも重要なことだと思います。それと、島根にはたくさんの魅力があることを知り、イメージが変わりました。これまであまり興味がなかったのですが、自分が調べた自治体には実際に行ってみたいです。

全15回の授業を終えた受講生たち。学んだもの、気付く部分もそれぞれで、一人ひとりにとって大きな力になったようだ。

地域情報アーカイブ Ago-Lab community information network

10月に本格オープンする、地域情報アーカイブシステム『Ago-Lab』。8月の学内限定オープンから約2ヶ月の助走期間を終え、学外も含めた全ての方々を対象に本格始動します。

『Ago-Lab』では、島根にかかわるヒトやコトの情報を誰もが投稿でき、それらを地域ごとにじっくり見渡すことのできる、インターネット上の広場を構築することを目指しています。現在、このシステムを活用した、人材育成や地域活動への利活用も計画しています。また、一般の方からの投稿も受け付けており、誰もが島根のヒト・コトについて共有できる開かれた情報公開の場として期待されています。ぜひ一度『Ago-Lab』をのぞいてみてください。

写真は製作中のトップ画面。投稿された画像が一覧で表示される。

しまだい×世界

世界へ広がる 世界とつながる

International exchange of Shimane University

FROM

出身校

コペルニクス大学
（ポーランド）

パジシェック・ナタリア
Parzyszek Natalia さん
（教育学部 日本語・日本文化研修留学生）

世界22か国・地域、73の大学と交流協定を結んでいる島根大学。毎年、多くの島大生が海外へ留学し、また、多くの留学生も海を渡ってやってきます。留学経験のある学生に、留学体験についてお話をうかがいました。

人や環境に支えられて学びを深めることができた

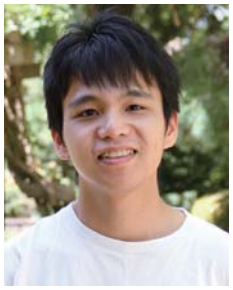
私が日本に興味を持ったきっかけは、中学の時に偶然聞いた日本人の会話でした。内容は分かりませんでしたが、硬い音が多いポーランド語と比べて、日本語は音楽のように美しく聞こえました。そこから日本語について調べるようになり、大学では日本学科で3年間学びました。私はホラー好きなのですが、文学の授業で紹介された小泉八雲の怪談に関心を持ち、学科の日本人の先生が松江市出身だったこともあり、迷わず島根大学を選びました。最初は、日本語にまったく自信がなく不安でしたが、先生や友人たちに様々な場面で助けられ、今では苦手だった日本語での発表にも慣れました。島根大学という環境と、周囲の人たちがいたからこそ頑張れたと思います。帰国後はさらに日本語を勉強し、将来につなげていきたいです。

1.小泉八雲の怪談以外にも松江の文化に触れるナタリアさん。和菓子づくり体験や水郷祭など、様々なことを経験。
2.島根以外にも多くの県を訪れ、その土地その土地の文化を肌で感じた。

TO

留学先

ニューカッスル大学（オーストラリア）



樋口 進哉さん
（総合理工学研究科 1年）

自ら道を切り拓き 今後の武器を手にした

元々留学への意欲が高かった私は、2年生の時にアメリカのフロリダ大学へ3週間の短期留学に行きました。そこでの経験が私の留学熱をさらに強くし、3年時には、文部科学省が行う『トビタテ！留学JAPAN』という留学促進プログラムの存在を知り、応募。限られた時間の中で留学先や受け入れ先となる大学など、全てを自分で決めて交渉もしなくてはいけない中で、ニューカッスル大学と出会い、客員研究員として迎えてもらえることになりました。留学を通して、研究室の人たちをはじめ様々な人種の人と関わることで、私は人に愛される力が備わり、国や文化を超えて人間関係を築ける自信がつきました。今後は、研究職に就くかどうか悩んでいますが、社会に出れば必要な能力ですし、何より、1年間海外でやりきったという事実は、今後の私の武器になると確信しています。

1.研究室メンバーとの集合写真。留学中は博士課程の学生のような生活を経験。与えられたテーマに対して研究を行った。
2.現地で知り合った友人達と海に行った際の一場面。

FROM

出身校

ブラウィジャヤ大学（インドネシア）

アグン・マンガラ・プトラ
Putra Agung Manggala さん
（教育学部
日本語・日本文化研修留学生）

様々な価値観に触れて 毎日が気付きの連続

島根大学での留学生活は、「とにかく毎日が楽しい！」という一言に尽きます。大学での学びは、文法や文章読解の授業、日本語での発表のほか、学外に出て史跡や名所を見学したり、地域の方と交流したりと多彩でした。日本語のスキルアップはもちろんですが、様々な国の学生と過ごす中で、国の数だけ異なる価値観に触れることができたのは大きな収穫でした。同じ事柄であっても、「この国ではこのように考えるのか」と、いつも気付かされることばかりでした。あっという間の1年でしたが、この留学経験を生かして、将来は日本と海外の交流の懸け橋になれるような仕事に就きたいと考えています。私の出身都市・スラバヤは、高知県高知市と姉妹都市提携しているので、高知市で地域の観光振興や活性化に関われたらと思っているところです。

1.YouTubeを見て興味を持ち、自分達でアレンジをしたよさこいをインドネシアで披露。
2.他の留学生とともに様々な場所で日本を体感。写真は三瓶登山をした際の様子。

法文学部

島根県と密接に関わる古地図・古文書にみる文化遺産の景観復原

01

島根県に残る絵図や古文書を通じて文化遺産の景観復原に取り組む、法文学部社会文化学科の船杉力修准教授。江戸時代の古地図など、地域に残る関連史料を直接フィールドワーク等に応用する教育的取り組み等、文化景観が数多く残る島根県ならではの地理学的アプローチをお聞きしました。

法文学部 社会文化学科
船杉 力修 准教授
Funasugi Rikinobu

【専門分野】
歴史地理学

筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得。1999年より島根大学で教鞭を執り、石見銀山・出雲大社・城下町松江を中心に、絵図・古文書を通して文化遺産の景観復原に取り組んでいる。

豊富な史料が可能にする景観復原への取り組み

地理学を専門とする、船杉力修准教授が取り組む研究の中で扱われる「古地図」。とりわけ江戸時代、明治時代の地図、古文書を対象に、「例えば松江の場合、城下町の地図を復原し、現在と比較してどのような違いがあるのかを調査していきます。ただ、こうした都市景観の変遷だけでなく、斐伊川河口など地形の変遷なども古地図を基に復原、考察していきます」と船杉准教授。

こうした研究調査アプローチができるのも、地図、古文書などの歴史的文化遺産が豊富に残されている島根県だからこそ可能になったとのことで、「全国的に見ても、江戸時代初期（17世紀初期）の地図はほとんど残っていないのですが、松江はその当時の絵図が現存するばかりか、それ以降の各年代の地図をはじめ、研究価値の高い書物も数多く発見されていて、堀尾、京極、松平と続く、松江城城主の変遷による景観変化をしっかり追えるのが、城下町としての松江の素晴らしいところ。他の城下町ではこれほど厚みのある調査研究活動は難しいと思

気になるキーワード

自分たちが生活する研究対象は“島根県”

古地図、景観復原と、船杉准教授の取り組みそのものが、地域に根ざした研究。島根県に現存する豊富な史料（地図・古文書）をそのまま生かしたフィールドワークでは、自分の目で見て理解することの大切さをテーマにする。そうした研究対象のすべてが、実際に暮らしている島根県の中にあるということも、この研究の魅力と言えるでしょう。

います」と船杉准教授は続けます。

これまでも、企画展をはじめ、図録出版物や、古地図と現在の地図を比較して学べるパソコン教材の制作等、島根大学附属図書館と共同で現存する豊富な歴史史料を有効活用してきた船杉准教授。最近では、松江市に数多く残る城下町絵図の記載内容から、伝統的都市景観の特質、絵図の伝来過程の解明。さらに出雲・隠岐・石見国絵図の分析から地形変化の調査や、山陰道・銀山街道の復原作業。西洋地図における日本、特に山陰地方の記載内容についての研究。明治時代の海図・水路誌の研究など多岐にわたり、取り組みの一部はメディアにも取り上げられるなど注目を集めています。

古地図を用いて江戸時代の頃の松江について解説をする船杉准教授。「松江は歴史的にも価値のある古地図が数多く現存していて研究にも役立つものばかり」と同准教授。

目で見て学ぶ、吸収する独自のフィールドワーク

地域に根ざした研究活動を続ける船杉准教授。様々な取り組みの大部分は大学教育へフィードバックされますが、その中心となるのが、学生たちを交えたフィールドワークです。

「例えば、平成21年度に始まった一般教養科目『フィールドで学ぶ・斐伊川百科』では、出雲平野や斐伊川の河口の状況が一望できる山の展望台へ行き、そこで現物の地形と古地図を比較しながら調査を行います。この、地図を見るという座学の要素と、現地調査（フィールドワーク）の要素を組み合わせることで、見識をより深めてもらうねらいがありますが、目で見て理解する〝地図〟という教材の利点を大いに生かした取り組みだと言えるでしょう」（船杉准教授）

絵図調査の様子。現在とその時代のものとを比較して、地形や土地の区画などにどのような違いがあるのかを調査する。

こうした教養科目のフィールドワークから学部専門教育科目にわたる、古地図や古文書を使った授業は学生からの反応も良く、

実際に地域へ出て、目で見て学ぶフィールドワークを行う、船杉准教授。公開授業により一般の方々が参加することもあり、地域へ研究の成果を還元することにつながっている。

「現在、法文学部には県外学生が多いのですが、島根県には、城下町松江から出雲大社、石見銀山と、日本全国に通じた地域がたくさんあるので、それぞれの学生の地元と比較しながら勉強できる良さがあるんです。ここで勉強したものが、帰郷したとき、地域の捉え方や地域活性化に生かせるわけです。そういう面を大切に学生たちに教えています」。

地理学や教養科目の学生だけでなく、公開授業における一般聴講生の熱烈な反応も研究活動の刺激になっているという船杉准教授。「こうした公開授業をはじめ、私たちの研究の成果を地元に還元していくことを大切に、松江だけではなく、出雲大社や石見銀山など、島根県内に広く分布する多くの歴史的文化遺産を分かりやすく提供していくことで、観光面の強化等、地域活性化のお手伝いができればと思っています」。

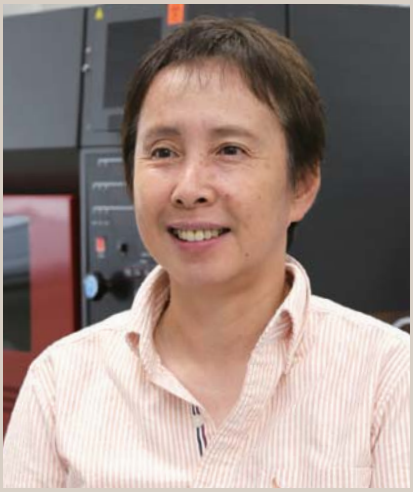
歴史的価値のある地図や古文書がまだまだ眠っているといわれる島根県。こうした魅力的な素材を生かした研究および地域活性に向けての今後の活動が楽しみです。

医学部

02

旧来の分離法を改革し優れた細胞採取に成功 再生医療の未来を拓く

新たな手法による精密なマーカー分析で、骨髄から優れた間葉系幹細胞(MSC)を分離精製することに成功した、医学部 生命科学講座 腫瘍生物学の松崎有未教授。「REC(レック)」と名付けられたその高機能な細胞集団を用いた臨床応用から大学発ベンチャーのお話などについてお聞きしました。



医学部 生命科学講座 腫瘍生物学
PuREC株式会社 取締役
松崎 有未 教授
Matsuzaki Yumi

【専門分野】
幹細胞生物学

筑波大学医学研究科博士課程を修了。ハーバード大学や慶應義塾大学で研究指導員、特任准教授を歴任。造血を中心とした幹細胞の分離とその性状解析。臓器幹細胞を用いた再生医療モデルの確立を目指す。

間葉系幹細胞(MSC)をさらに洗練させたREC

技術の進歩がめざましい最新医療分野の中でも、とくに世間の耳目を集めているものの一つに「再生医療」があります。

臓器移植から、骨髄移植、輸血まで、再生医療には幅広い意味が含まれ、様々な医療が行われますが、そのうち、幹細胞移植の分野を専門とする松崎教授は、骨髄内にある2種の幹細胞(造血幹細胞・間葉系幹細胞)のうち、間葉系幹細胞(MSC)を採取し、そこからさらに優れた細胞集団の分離精製法を確立しました。REC(レック=Rapidly Expanding Cells)と命名されたその幹細胞は、臨床応用を始め、ベンチャービジネス展開も網羅した、これからの再生医療を支える研究開発です。

もともと、骨髄内で血液の元となる造血幹細胞が活動する場所づくりを担うと考えられてきたMSCでしたが、それ自体から骨や軟骨、あるいは脂肪細胞を作り出せることが判明。以来、分離も培養も比較的簡単なことから、骨や軟骨の欠損を再生する移植細胞として長く使われています。

気になるキーワード

「REC」は幹細胞の大吟醸

酒米を35%削るのが大吟醸。これを幹細胞に置き換えると、99.9%削って残ったRECは、いわば究極の大吟醸。例えば、一般的な採取による幹細胞を1億個投与し、そのうち数百個程度しか機能しないのに対し、1億個投与して、ほぼ同数の細胞が機能を果たすのがREC。つまり同じ数の細胞を投与すれば1000倍以上の薬効性能を持つ究極の幹細胞ということになる。

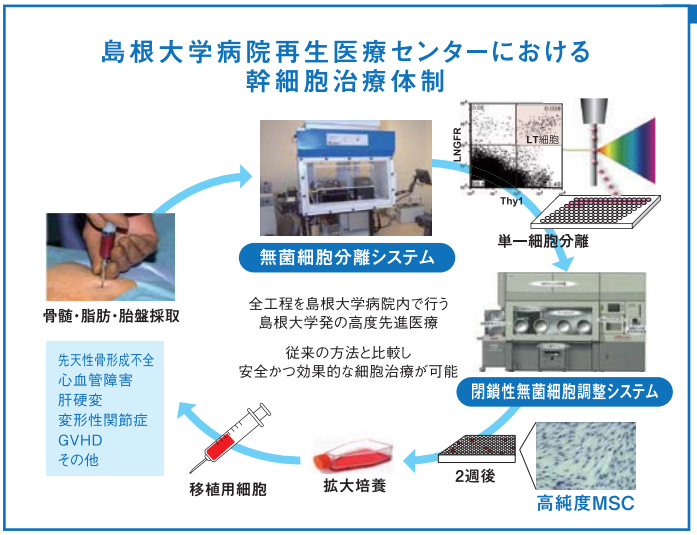
しかし、再生医療の可能性を広げたＭＳＣには、従来の採取法では血球系の細胞等が混ざり、純度の高いＭＳＣが採取できないこと。また、経静脈注射の際、肺血管に詰まるため、一度に大量投与ができないという二つの問題点がありました。

このことからも分かるとおり、採取法が極めて重要で、「ドナーから採取した細胞から、①必要なものだけを取り出し、②採取・分離した細胞の性質をできるだけ変えずに増やし、③その細胞の性質を担保するための指標づくり。この３ステップを洗練させることができないかと考えました」（松崎教授）。

目標を定めた松崎教授がまず着手したのが、旧来の分離法の改革。骨髄からリンパ球などの要らないものを分離前の段階で取り除くため、染色（マーカー）と光学分析による優れた細胞の特定を進めます。

４年を費やした選定作業でしたが、さらに分離を洗練するため、特殊なプレートを用いて細胞を一つずつの能力を検証。試行錯誤の末、ＭＳＣの中に極めて低い割合で存在する、幹細胞移植に適した増殖や分化といった能力を持つ優れた細胞を効率よく分離することに成功。急速（Rapidly）に拡大（Expanding）する細胞（Cells）の頭文字から「ＲＥＣ」と命名、今日に至ります。「長くかかりましたが、純度の高いＭＳＣの採取が可能になり、これにより微細な肺血管に詰まらず、骨に到達することも確認でき、さらに同じマーカーを使って骨髄以外の脂肪組織や胎盤などからもＲＥＣが採取できることも分かりました」（松崎教授）。

研究室での研究の様子。松崎先生と研究員の方々とで再生医療の未来を切り拓くため日々研究に励んでいる。



島根大学再生医療センターにおける幹細胞治療体制を表した図。

難病への臨床応用から大学発ベンチャーへ

現在、医学部小児科の竹谷健教授の元で、低ホスファターゼ症（※）に対する臨床応用の準備が進められていますが、「すべてにおいて治療効果のあるＭＳＣですが、これをＲＥＣに置き換えれば、圧倒的に優れた治療が実現するでしょう」と松崎教授は言います。

また、凍結保存できることから、緊急時の細胞移植にも対応可能で、現在はその体制づくりも進められています。さらにこの取り組みを発展させるべく、松崎教授が取締役を務める島根大学発ベンチャー会社「ＰｕＲＥＣ（ピュレック）」も設立されました。

「安定的に採取でき、かつ凍結保存を可能にしたＲＥＣを研究用として販売するための会社です。全国に供給できる体制が整えば、別の病気治療に対する活用も期待できます。会社として利益追求はもちろんですが、いろいろな医療分野でＲＥＣの可能性を広げてもらいたい。それが販売の大きな目的」と松崎教授は言います。

島根大学病院再生医療センターにおける幹細胞治療体制が完全に整い次第、本格的に始動する松崎教授の取り組み。再生医療の明るい未来を切り拓きます。

※低ホスファターゼ症　生まれつき骨がもろく、成長とともに骨がなくなってしまう難病。

島根大学発ベンチャーとして、今年1月に行われたPuREC株式会社設立の際の記者会見の様子。

生物資源科学部

害虫の生態を利用した新しい防除法の開発 農薬に頼らない未来へ

害虫の生態を利用した新しい防除技術の開発に取り組む、生物資源科学部 農林生産学科の泉 洋平准教授。害虫被害に困っている生産者の声に耳を傾け、それを参考にしながら防除法にアプローチする独自の研究開発の現状をお聞きしました。

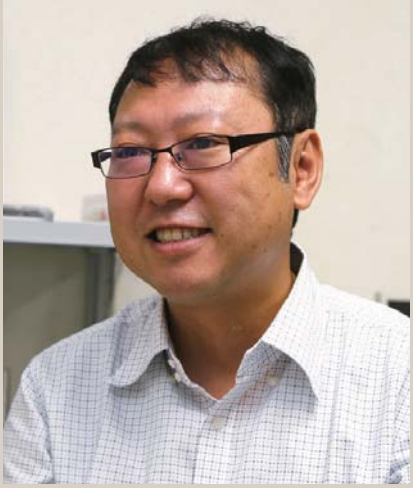
生態を逆手にとって独自の害虫防除へ

農業害虫の新規防除技術の研究開発が専門で、現在は島根県農業試験場の協力のもと、県産ブドウ(主にシャインマスカット)の果汁を吸汁するヤガ(※夜蛾)の防除に取り組む、泉准教授。

これは、今なお確立されていない、化学合成農薬に頼りすぎない害虫の防除法を明らかにしていこうという意欲的な研究活動で、注目すべきは、食性や越冬時期等、害虫の生態を調査、その嗜好や行動への理解を深めることで、それらを利用した防除技術を開発しようとする点です。

高知県や岡山県の教育・研究機関で先人に師事し、害虫の防除研究をスタート。当時、天敵昆虫を使って害虫を制御するという取り組みが始まった時期でもあり、そのアプローチの面白さに魅了されたことが、今日の研究活動へと続くきっかけだったという。泉准教授は、「農家の高齢化、後継者不足等、現代の農業を取り巻く社会的問題も深刻。そうした面を補完するためにも、農薬は今後も必要なものですが、栽培作業に直面する人々の健

03



生物資源科学部 農林生産学科
泉 洋平 准教授
Izumi Yohei

【専門分野】
応用昆虫学

昆虫の持つ独自の機能を解明することで、新しい害虫防除法の開発を行う。また、近年の地球温暖化により分布の拡大が問題となっている農業害虫の、化学合成農薬に頼らない防除法の開発を目指している。

気になるキーワード

害虫を知り害虫を騙す 未来を支える防除法

ハチなどの天敵昆虫を使ったり、害虫が嫌う匂いを散布したり等、害虫のことをよく知り、その生態を理解することで成立する、泉准教授の取り組みは、この成果だけでなく、従来の農薬と上手に共存する農業を提案する。この共存が、農業生産者の負担軽減にもなり、最終的には消費者の安心にもつながっていく。

康面、さらに消費者の安心といった部分で、農薬を減らしていくことも大切。そういう諸問題に対して少しでも役に立ちたいという思いから、この取り組みをスタートしました」と振り返ります。

研究対象となる果実の葉や昆虫を採取する、泉准教授の研究室の学生。中四国の農業試験場と連携しているということもあり、研究対象物は豊富。

匂いの嗜好性を精査しトラップを仕掛ける

防除対象となるヤガの問題点は、収穫直前の熟したブドウ果実のみに被害を加えること。さらに口吻を直接果実に差し込み吸汁するため、果実が傷んで商品として出荷できなくなることです。

これら被害を防ぐべく、近隣の山野から日没後に飛来して吸汁するというヤガの生態から、果実の揮発成分（匂い）が重要な手がかりと仮定、調査が進められました。

「ヤガ類が熟れた果実に集まることは、過去の観察研究でも実証済みです。匂いについても、岡山時代にモモに被害を及ぼすヤガ類防除の経験から、ある程度絞り込んで始めることができました」（泉准教授）。

夜に行動するため触角が発達しているヤガは、匂いをもとに餌を探します。また、メスが発するフェロモンをオスが触角で感じ取って交尾を行うなど、ヤガ類にとって触角は重要な匂いを感じ取る器官でもあります。

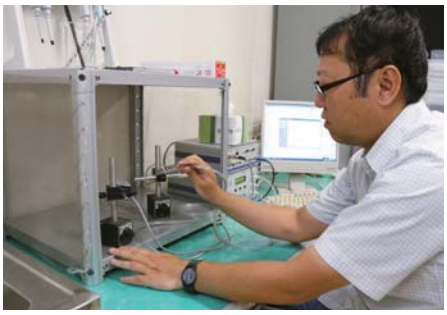
実験では、切り取ったヤガの触角に電極を付け、この種の昆虫特有の触角電図（ＥＡＧ）を計測。実験のプロセスはシンプルですが、匂い濃度を段階的に分けたり、匂いのブレンドをいろいろな比率に変えたりと、おびただしい数の匂いパターンを精密に検証していかなければなりません。

さらに次ステップでは、本当にヤガが嫌がるのか?を検証するため、熟れた果実を設置した観察箱に、前ステップでふるい分けた匂いのサンプルを散布し、ヤガの行動を観察していきます。こうしたトライ＆エラーを繰り返し、実際の圃場（生産地）での活用を目指していきます。

「例えば、熟れている時期に、熟れてない時期の匂いを充満させておく。つまり害虫を騙して被害を抑える手法です。ブドウは施設栽培に近いので効果が期待できますが、その匂いが果実に及ぼす影響までを確認しなければならないので、実用化には時間がかかります。今後も他の作物への応用の可能性など含めて、検証を続けていきます」（泉准教授）。

現在はこの取り組みの他、愛媛県の農業試験場と共同でユズ果実の害虫防除にも力を注いでいるとのこと。生産者や専門家など、現地の農業家の声を大切にした、これからの農業のための、泉准教授の新たな害虫防除法の開発に期待がかかります。

※夜蛾　成虫が各種果物の果汁を吸汁するチョウ目ヤガ科害虫の総称。果実吸蛾類のこと。



ヤガの触覚に電極を付け、昆虫特有の触角電図（EAG）を計測する泉准教授。右手に持ったチューブから多様な匂いを触覚へ送り、匂いパターンを調べている。

日没後、暗くなってからモモなどの果実にとまり、吸汁するヤガ。こうした被害を防ぐべく、泉准教授の研究が注目を浴びている。

未来の島大生に魅力を伝える

オープンキャンパス2016開催

高校生・受験生へ 島根大学の魅力を発信

今年も8月に、松江・出雲の両キャンパスで開催された島根大学のオープンキャンパス(医学部は10月にも開催)。高校生・受験生に島根大学のことをより詳しく知ってもらい、大学に興味を持ってもらうことはもちろん、受験の悩みなどの不安を取り除くことを目的に開催し、多くの高校生・受験生・保護者が訪れました。

8月7日には、教育学部・生物資源科学部・医学部、8月8日には、法文学部・総合理工学部が開催しました。それぞれ内容は異なるものの、学科や講義の紹介だけでなく、授業体験や、個別相談コーナーを設け、高校生・受験生が入学後の自分を想像できるような内容で来場者を迎えました。来春新設する「人間科学部」は、8月7・8日の両日に開催し、学部の特色やコース解説などの概要説明、個別相談会などを行いました。

運営自体は大学の教職員を中心に行うオープンキャンパスですが、来場する高校生・受験生に、より島根大学について知ってもらい、楽しんでもらうため、各学部での学生の発表や、昼休憩を中心とした学生独自の企画も毎年行っています。松江キャンパスでその企画の中心となるのは、松江水燈路をはじめ、地域のイベントなどでも活躍する学生団体「キャンパスゼミナール・ネットワーク」と、当日スタッフの学生約100名。今回のオープンキャンパスでは、全体リーダーである加木屋杏夏(かぎやきょうか)さんを含め6名のリーダーを中心に、高校生・受験生を楽しませる企画を実施し、笑顔あふれるオープンキャンパスになりました。

8月7日に開催された医学部のオープンキャンパス。医学科、看護学科でそれぞれ行われた演習授業体験には、多くの高校生・受験生が参加しました。

学生の力で
こんな企画を実施しました!!

学生目線で伝える 島根大学の魅力

高校生に宝(＝島大の魅力)を見つけて帰ってもらおう!と考え、コンセプトを「宝探し」として行った今年のオープンキャンパスは、まさに「チャレンジ」の年でした。今年は、オープンキャンパスの企画経験がほとんどないメンバーが多く、一人ひとりの力量が違えば、出来ることも違ってきます。

例年までの型にはめず新たなことにチャレンジしようと準備段階から考えていました。例えば、学生相談とキャンパス案内は、それぞれ別の企画ですが、受付を1つにまとめることで、スタッフの負担を少なくしつつ、より高校生のニーズにあった案内ができるように改善しました。

今後は、次の代の学生スタッフに、これまでの先輩方、そして今年の私たちの姿を見て感じたこと・学んだことに、自分たちの想いをプラスして来年へとつないでもらいたいと思います。

一人でも多くの高校生が島大に興味を持ち、島大の魅力に気づいてもらえるオープンキャンパスであり続けて欲しいです。

加木屋 杏夏さん
全体リーダー
生物資源科学部 3年

学生相談 シマトーーーク!!

受験や入学後の生活に不安のある高校生から相談を受け、自分達の経験を通してその不安を軽くしてあげたいと思い企画しました。高校生のみならず、保護者の方からも、大学の知らない部分が知れて良かったというお声をいただき、嬉しかったです。

下野 一樹さん
学生相談企画リーダー
総合理工学部 2年

キャンパス案内 トレジャーツアー

学内にある宝＝『島大の魅力』を探しながら高校生と一緒に歩くことで、島大ならではの良さを学生目線で伝えました。両日とも50組以上の高校生に参加してもらうことができたので、企画して本当に良かったです。

田中 里枝さん
キャンパス案内企画リーダー
法文学部 2年

食提供 オアシストラン

県外からも参加する高校生に、普段島大生が食べているものや、周辺地域のオススメ商品を食べてもらい、食を通して島根大学を知ってもらうために企画しました。地域の飲食店の方と交渉したことも非常に貴重な経験になりました。

小倉 拓斗さん
食提供企画リーダー
総合理工学部 3年

ステージ企画 野外ステージ

野外ステージでダンスサークルの人たちに演技を披露してもらうことで、大学の雰囲気や、学生の普段の活動の様子を知ってもらおうと企画しました。立ち止まったり、参加してくれる高校生もいたので、少しでも大学のことが伝わっていると良いなと思います。

中本 悠太さん
ステージ企画リーダー
教育学部 1年

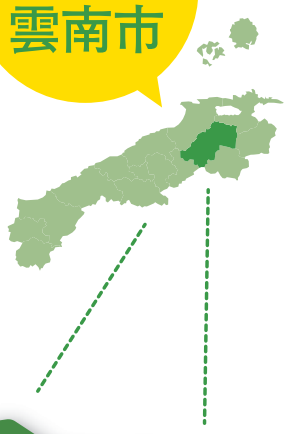
地域 魅力の宝庫☆ 島根を紹介します!

地元出身者だからこそ伝えられる島根の魅力を、県外からも来る高校生や保護者の方へ伝えました。八重垣神社の鏡の池をミニ版で再現しましたが、学生が巫女姿になって行ったこともあり、興味を持ってくれる高校生が多く、嬉しかったです。

杉原 里奈さん
地域企画リーダー
法文学部 2年

キャンパスゼミナール・ネットワークの学生が教えるしまだいの魅力はコチラから!!

今回紹介する
自治体は…
雲南市



しまだい×島根のまち

各学部・学科単位で県内様々な市町村とのつながりをもつ島根大学。その広いつながりの中で、大学と地域、2つの要素が合わさったとき、一体どのような効果が生み出されているのか。具体的な取組みを交えて紹介します。

幸雲南塾 × 島根大学

地域の未来を創る若手人材の育成や、若者や市民の地域活動を支援するために活動する、『NPO法人おっちラボ』。そのおっちラボが雲南市から委託を受けて企画・運営しているのが、課題解決型の人材育成を目的に、2011年よりはじまった「幸雲南塾 〜地域の未来を創る人の育成塾〜」です。

20〜30代の社会人が多い中、若干名ながらも、毎年島大生も参加。雲南市での学びと実践の機会を通して、実際の事業化を目指す塾生が多い中で、島大生はすぐに事業化をという考え方の学生は少ないながらも、塾生のサポートやボランティアを通して地域について学び、課題解決の一端を担おうと活動しています。おっちラボ事務局長の小俣健三郎さんは、「学生はそもそも探究心が旺盛で、先入観もない。社会人からするとそんな学生の考え方や意見が新鮮に感じられ、とても刺激になります。若いパワーがもらえることも、学生参加のメリットの1つですね。」とのこと。小俣さんはさらに、「今後は、今あるプロジェクトの数を増やしていく過程で、学生の若いエネルギーを巻き込んでいけたらと思っています。仮におっちラボがなくなったとしても、こうした活動のノウハウが雲南市に残り、市全体を人材育成がされる生態系として構築していきたいですね。学生には将来地域を担う存在になってほしいので、そのための学びの場の提供は惜しみません。そのための意欲のある人は大歓迎です。私たち社会人も、主体的に何かしている姿を見せ、雲南市をおもしろいアイディアが生み出せる場にしたいですね。」と、語られました。おっちラボと島根大学とのつながりに今後も目が離せません。

幸雲南塾を運営するおっちラボの、小俣健三郎さん(中)・和泉匡成さん(左)・上野奈苗さん(右)。

新規採用職員地域研修 × 法文学部

これまで法文学部社会学研究室が取り組んできた、学生が集落に出かけ、「生きがい」や「地域への想い」をテーマに聞き取り調査を行い作成してきた『聞き書き文集』。大学では、地域課題の把握や人材育成で有効であるとともに、市民との協働をめざすためにも重要なことと考え、学生を職員に置き換えて職員研修として取り組むことを市へ提案。平成22年度より実施されています。雲南市では、新規職員が市内の地域実態を把握し、研修することで、職務遂行に役立てています。

雲南市ってどんなところ?

島根県東部に位置し、加茂町、大東町、木次町、三刀屋町、吉田町、掛合町の6つの町から成る雲南市。滝や渓谷をはじめとした豊かな自然が様々な表情を今も昔も変わらず魅せてくれるこの地では、神話の伝承地とこの町を支えた、たたらの歴史が今もなお残されています。

地域医療実習 × 医学部医学科

医学部医学科では、大学では学ぶことが難しいプライマリケアの実践的能力を修得するため、そして、地域医療に対する意欲の向上を図り、地域医療を担う人材養成を推進するために、地域医療実習を積極的に行っています。県内約70箇所を学び場とし、その中で雲南圏域では、雲南市立病院や平成記念病院など、4箇所で地域医療実習が実施され、学生の意欲向上や実践的診療能力の獲得に成果を上げています。

地域看護学実習 × 医学部看護学科

地域で生活する人々の健康・生活を支援する保健師に必要な知識・技術および地域ケアのあり方について理解を深め、公衆衛生看護活動の専門職としての態度を養うために行う地域看護学実習。雲南市・雲南保健所をはじめ、県内19市町村及び7保健所で3週間の実習を実施します。健康相談や家庭訪問等の場に同行し、参加することで、実際に地域の健康課題について学び、その解決のために考え、動けるような人材を育てるため、行っています。

生活習慣病コホート研究 × 疾病予知予防プロジェクトセンター

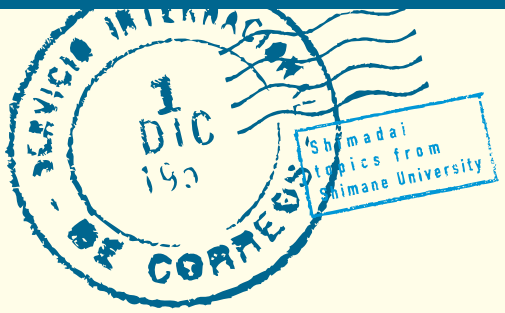
コホート研究とは病気の発症に関連する要因を解明するための疫学研究手法の一つです。住民の方々の健康に関するデータを長期間にわたって収集し、病気を発症した方と健常な方のデータを比較することにより、病気に関わる要因を探り、病気の予防につなげます。島根大学では雲南市をはじめ6市町と協働し、医学的な観点だけではなく、地域の環境や社会学的な視点も加えて、地域住民の生活習慣病を予知し、予防するための研究を行っています。

1000時間体験学修 × 教育学部

様々な教育活動や地域活動に参加して行う「基礎体験」、附属学校園での教育実習による「学校教育体験」、カウンセリングや教育相談などの実習を通して行う「臨床・カウンセリング体験」の3領域の体験学修を、4年間を通じて積み上げながら、教員として必要な教育実践力を身につける1000時間体験学修。雲南市とは、雲南市教育委員会や株式会社キラキラ雲南の主催するイベントへスタッフとして参加することで、実際に子ども達と交流し、現場経験を積んでいます。

中山間地域フィールド演習 × キャリアセンター

産学連携を促し、学生の自立を進めるために2012年から行われている、雲南市を舞台にしたフィールド演習。実際に地域へ飛び出し、地域課題や地域貢献のあり方について学ぶことで、地域の方々の想いに触れたり、さらには地域の特徴や課題を的確に理解・把握することができる人材の育成を目標としています。学生は雲南市内5地域・団体の協力を得て1年間通い、高齢化や人口減少が進む中山間地域を肌で感じながら地域の現状について学びます。



大学のホットな情報をお届け

しまだい便り

島根大学が学内外問わず行っている多彩な活動の中から、
大学の今がわかる選りすぐりの情報をお伝えします。

こころを知る・からだを知る・人をささえる

「人間科学部」発表記者会見を開催

9月2日、来春より新たにスタートする新学部「人間科学部」の発表記者会見が、本学にて行われました。以前より、文部科学省へ新学部の設置申請を行っており、この度正式に設置計画が承認され、来年4月から本学6番目の学部として動き出します。

会見の冒頭で、服部学長から、本学の機能強化による組織の見直し及び、人間科学部の設置趣旨についての説明が行われ、続いて、秋重企画・学術研究担当理事より設置承認までの経過についての説明がされました。さらに、村瀬学長特別補佐（新学部設置準備担当）から、学部の入試の概要について説明が行われ、それらを受けて、参加した報道機関の記者からは、「地元への就職にどう結びつけるのか」、「どのような学生に入学してもらいたいか」など、多数の質問が飛び交い、人間科学部に対する関心の高さが伺えました。

本学初の試み！大学の魅力を映像で発信

大学PRビデオ完成披露試写会を開催

実際のPVの映像はQRからご覧いただけます。

7月6日、本学プロモーションビデオの完成披露試写会を行いました。「島根大学だけでなく、島根の魅力も広く知られるきっかけになってほしい」との想いから、映像内では本学学生や教職員のほか、本学卒業生の音楽バンド「Official 髭男 dism」、しまねっこも出演し、キャンパスや周辺観光地などをPRしています。今後はオープンキャンパスや大学訪問などで活用予定です。

山陰発の新技術！本学からは3件発表

新技術説明会を開催しました

7月14日、山陰地域の大学と公設試験研究機関が連携し、JST東京本部別館において、材料分野及びライフサイエンス分野の新技術説明会を行いました。本学からは、材料分野では総合理工学研究科・梶川靖友教授、同研究科・葉文昌准教授、ライフサイエンス分野では産学連携センター・中村守彦教授が発表しました。参加者は、山陰発の新技術に熱心に耳を傾けていました。

地域医療の将来に不安や疑問があるので、取組みを是非取り上げてほしいです。
（島根県松江市・50代女性）

大学が地域とつながるにあたり、人権問題に対しての取組みについて知りたいです。
（島根県大田市・60代男性）

地域活性化のための人材や、アイディアを担う人が育つ環境づくりに期待しています。
（島根県出雲市・50代女性）

働きやすい職場環境づくりを目指す

仕事と私生活を応援する「イクボス宣言」を発表

7月20日、学長及び理事による「イクボス宣言」を行いました。この宣言は、各構成員の仕事と私生活の両立を応援し、学長自らがイクボスとなることで学内の管理者にイクボスを増やし、男女ともに働きやすい職場環境をつくることを目指すものです。服部学長から、仕事と私生活を充実して過ごせるよう積極的に支援すること、関連制度の確立や機運醸成などの環境整備など7項目が盛り込まれている宣言書が読み上げられました。同日には、宣言に先立ち、NPO法人ファザーリング・ジャパンの理事・川島高之氏を講師にお招きし、講演も開催されました。

透析患者さんでも安心して食べられるメロン開発

「しまね夢メロン」食事提供記者発表

8月2日、ホテル一畑において、「しまね夢メロン」(商標登録)を使った食事提供についての記者発表会を行いました。本学と一畑グループは、本年3月に包括的連携に関する協定を締結しており、この度、低カリウムメロンプロジェクトチームが、生物資源科学部本庄総合農場で研究開発したメロンを使い、腎臓を患い、食事制限のある透析患者さんに安心して食べていただけるメニューを考案、ホテル一畑でアレンジ・創作し、提供することになりました。今後は、量産化を視野に入れ、ホテル一畑では、季節に合わせたメニュー提供を目指しています。

看護・介護の場面をやさしく照らす

「ハンズフリーLEDライト」実用化発表

8月17日、医学部と地元企業のDoライト株式会社、株式会社島根富士通とで共同開発した「ハンズフリーLEDライト」についての報道発表を行いました。このLEDライトは、患者対応で両手が塞がった状態でも、体勢制御によりハンズフリーでON・OFF操作ができ、誤動作回避機能も備えています。入院患者および看護師双方に「やさしい」本ライトの活用により、看護の質向上が期待されます。

これまでの連携をより強固な関係に

教員研修センターとの協定締結を発表

8月31日、本学大学院教育学研究科と、独立行政法人教員研修センターとの連携協力に関する協定の締結式が行われました。本学教育学部では、以前から教育委員会と協働で実施している、現職教員研修への講師派遣などにより連携がありましたが、本年4月に設置した教職大学院では、教員研修センターが実施している研修の受講を含んだ授業科目を設けたことから、この度の締結となりました。

読者の声 Voice

広報しまだい vol.29に寄せられた声をお届けします。

毎号楽しく拝読しています。
学生の活躍する姿を見て、
頼もしく感じています。
(島根県邑智郡・70代女性)

古代出雲文化フォーラムの
ことをはじめて知り、興味深く
拝読しました。
(大阪府大阪市・30代女性)

学生プレス研究会 presents

学生活動紹介

しまだい Active

SHIMADAI + ACTIVE

学業はもちろん、部活や大学行事、学内イベントなど、学内外問わず様々な場面で活躍する島大生の活動や、学内のできごとを、学生プレス研究会が紹介します。

今回は、「障がい学生支援室」と「田舎体験ツアー」について紹介します。

活動 01

障がい学生支援室を新設 全学的に広がる支援の輪

島根大学に今年度から障がい学生支援室が新設されました。同支援室には専門スタッフが常駐、障がいがある学生と面談し、最適な支援の方法などを考えていきます。また支援サポーターとして活動する学生の養成も行います。

障がいのある学生や保護者からの連絡を受け、障がい学生支援室が窓口となって、個別の特別支援が必要な場合は大学としての組織的な支援を開始します。

具体的な支援としては「次の講義の教室が遠く15分の休憩時間に移動することが困難」という肢体不自由の学生の相談を受け授業の教室変更を行ったり、聴覚障がいのある学生に補聴器を貸し出したりしています。

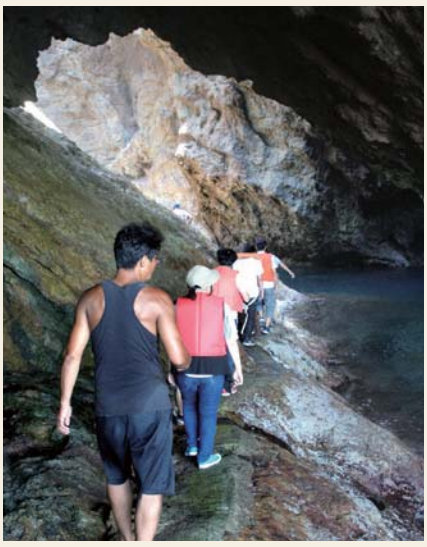
支援サポーターの養成も同支援室の大きな役割です。聴覚障がいのある学生の中には、授業で板書をノートに書き写すことが困難な人も

活動 02

鵜鷺（うさぎ）地区の魅力を伝えたい！ 学生が「田舎体験ツアー」を企画

出雲大社の北側、日本海に面した出雲市の鵜鷺（うさぎ）地区で、8月24・25日の2日間、島根大学の学生4人が企画・運営した、「田舎体験ツアー」が行われました。「NPO法人ふるさとつなぎ」と「鵜鷺コミュニティセンター」、鵜鷺地区の人たちの協力を得て実施されたツアーには、島大生13人が参加しました。

ツアーは、NPO法人ふるさとつなぎの事業「しまね暮らし体験」に学生スタッフとして参加していた佐野慎太郎さん（法文学部2年）が、「島大生に魅力的な鵜鷺を知って



プログラムの1つであるクルージングの途中、潜戸（くけど）洞窟を訪れ散策する島大生。

後進県だと思っていた島根が、古代の出雲ではそうではなかったと分かり、嬉しくなりました。
（島根県松江市・70代女性）

広報しまだいを初めて手に取りました。大学の活動が垣間見れて良かったです。
（島根県益田市・50代女性）

卒業生の、社会人としての向上心を持ち、働いていきたいという想いが伝わりました。
（島根県浜田市・20代女性）

母校の活動、特に産学協同や地域での活動が分かり、嬉しいです。
（島根県松江市・40代女性）

多く、そういった場面で支援を行うのが障がい学生支援室が養成しているノートテイカーです。ノートテイカーは、聴覚障がいのある学生の隣に座り、授業担当者の説明や学生の発言など音声情報の書き取りを行います。今年度前期には4人の学生がノートテイカーとしてサポートを行いました。障がい学生支援室は後期にもサポーター育成の企画開催を検討しています。

学生の相談を受ける、支援室の専門スタッフ。支援サポーターを目指す学生の養成も役割の1つだ。

障がい学生支援室が中心となって、学内でさまざまな学生支援の取り組みがつながり、支援の輪が大きく広がっていくことが期待されています。障がい学生支援室の境英俊室長は「さまざまな支援を通して、島根大学がみんなに優しい大学になっていければいいと思う」と語っていました。（学生プレス研究会・平等正裕）

SHIMADAI + ACTIVE

ほしい」という思いから企画しました。

一泊二日のツアーでは、釣りやバーベキューなどのほか、「しまね暮らし体験」のプログラムであるクルージングや塩炊き体験、地元民との交流なども行われました。

参加した学生は、「鵜鷺について今まで全く知らなかったが、この二日間で鵜鷺の人たちと知り合えて良かった」「ただのツアーではなく、クルージングや塩炊き体験など、鵜鷺の魅力を知ることができて良かった。ぜひ鵜鷺のことを発信していきたい」と、充実した二日間を語っていました。

主催者の佐野さんは、「今後も学生に向けたツアーを実施したい」と話しています。（学生プレス研究会・川功行）

読者の声 Voice

広報しまだい vol.29に寄せられた声をお届けします。

COCを通して地域の活性化を図ってくださっていること、大変頼もしく思っています。

（奈良県奈良市・70代男性）

しまだい's サークル
Shimadai's Circle

各キャンパスでそれぞれの特色を生かして活動する島大生。運動系や文化系はもちろん、大学を飛び出して活動する団体もあり、活躍の幅は様々です。そんな各団体について、実際の活動内容を交えて紹介します。

松江キャンパス

美術部

本学で12月開催の「島根音美」は美術部の一大イベント

松江キャンパス文化系サークル「美術部」は、アート系ならではの自由な活動だけでなく、週1回の全体活動が大きな特徴で、各々技術や感性を磨きながら部員間の親交が深められると、部員にも好評な活動の二本柱です。また4月の新入生歓迎展を皮切りとする年4回の学内展の他、毎年12月には音美(※)と呼ばれる中四国国立大の美術音楽系サークルの一大イベントがあり、今年の開催地は島根県。ホストを務める本学ですが、会場もキャンパス内ということで、実行メンバー兼務の部員たちは今から大忙し。「学内開催は何かと大変ですが、一般の方々にも私たちの活動を知っていただける良いきっかけになる」と部員たちのやる気もみなぎっています。

※音美(おんび)とは、「中・四国国立大学音楽美術連合会」の通称。美術部の他、陶芸部、書道部、写真部との共同イベントで、開催日は12月16日(金)〜18日(日)。音楽部門は出雲市民会館にて12月3日(土)4日(日)。

1.1年生から院生を含め、総勢33名で活動する美術部。活動以外でも部員同士の仲が良く、レクリエーションも多々。2.週に1度の全体活動では、クロッキー(速写画)や静物画を中心に部員で技術を磨く。

出雲キャンパス

少林寺拳法部

それぞれのペースで向き合いながら文武両道をめざす

医学部の前身、島根医科大学創設時から活動を続ける「少林寺拳法部」。現在は、1年生から5年生まで、合わせて10名の部員たちが、医学生ならではの忙しい大学生活のなか、週2回の練習をしっかりこなしています。
大学に入ってから始めた部員が大半ですが、『人それぞれの体力に合わせて行う』という少林寺拳法のスポーツ要素が医学生との相性がよく、「自分なりにしっかりこなすことで、(勉強の)メリハリになっています。それは部員全員が同じ気持ちだと思います」と、阿部大輔主将は言います。日頃の成果を発揮する場として、演武を競う県大会(6月)が開催されるほか、秋には、本学少林寺拳法部や鳥取大学との合同練習も行われます。

1.女子学生2名を含む10名の部員のなかには、全国大会への切符を手にした実力者も! 2.演武のテキストと真剣に向かい合いながら練習に精を出す部員たち。

NBL・TKbj統合元年！Bリーグ開幕！

スサノオ戦士たちにエールを!!

9月24日に開幕した新リーグにより、新たに始まった島根スサノオマジックの神話新章。今シーズンは、これまで分かれていた「NBL」と「TKbjリーグ」の2つが統一される、歴史的シーズンの始まりであり、B1昇格を目指すスサノオ戦士たちの新たな戦いの始まりとなります。ぜひ会場で彼らを後押しする熱い声援をよろしくお願いします。

00 ジョシュ・デービス(F)
生年月日：1991.1.22
出身地：アメリカ合衆国
身長：203cm　体重：98kg

1 岡本 飛竜(PG)
生年月日：1993.4.20
出身地：鳥取県
身長：170cm　体重：78kg

5 山本 エドワード(PG)
生年月日：1986.12.2
出身地：鳥取県
身長：173cm　体重：78kg

12 寒竹 隼人(F)
生年月日：1986.8.1
出身地：福岡県
身長：194cm　体重：90kg

31 高畠 佳介(G)
生年月日：1990.3.17
出身地：滋賀県
身長：183cm　体重：78kg

32 安部　潤(G)
生年月日：1986.4.14
出身地：島根県
身長：177cm　体重：72kg

42 ライアン・リード(PF)
生年月日：1986.10.30
出身地：アメリカ合衆国
身長：204cm　体重：107kg

44 栗野　譲(F/C)
生年月日：1980.7.28
出身地：神奈川県
身長：195cm　体重：100kg

50 ウェイン・マーシャル(C)
生年月日：1986.1.7
出身地：アメリカ合衆国
身長：211cm　体重：130kg

55 横尾 達泰(SG)
生年月日：1985.2.28
出身地：愛知県
身長：185cm　体重：81kg

島根スサノオマジックの最新情報は…

島根スサノオマジック公式HP　http://www.susanoo-m.com/　島根スサノオマジック　検索

お問い合わせ先　島根スサノオマジック事務局　0852-60-1866（平日10時～18時）

島根大学支援基金寄附者一覧

ご協力ありがとうございました。

冠寄附
医療法人 同仁会
同仁会アジア精神医留学生支援奨学金
（医学部精神医学講座アジア留学生支援）

個人からのご寄附
北脇美恵子　永田まち子　藤本正昭　吉村信恵
※平成28年5月1日～平成28年7月31日にご寄付いただいた皆さま
（五十音順・敬称略）

島根大学では学生に対する修学支援及び社会貢献事業を充実させるため、「島根大学支援基金」を募集しています。寄附書はホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますので、お問い合わせください。

TEL 0852-32-6603（総務課）

ホームページ
http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/fund/fund_recruit/
※ご寄附をいただいた皆さまの中で、「HP等への掲載を希望しない」とされた方は、掲載しておりません。

編集後記

暑い夏が過ぎ、涼しくなってきましたね。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

島根大学では平成29年4月より、新しい学部「人間科学部」がスタートします。人間科学部については今回の特集1でもご紹介いたしましたが、一体どのような学部なのか!?これからの広報しまだいでも継続して皆さまにご紹介したいと考えております。

また、「しまだい便り」では島根大学プロモーションビデオの完成披露試写会の様子を紹介しております。QRを貼り付けておりますが、プロモーションビデオは本学ホームページやYouTubeでご覧いただけます。是非一度ご視聴ください。

さて、これからも私どもは読者の皆さまのご意見やご要望をお伺いしながら、広報しまだいをより良いものにしていきたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

投稿のお願い

「広報しまだい」は、島根大学と地域の方々との相互理解を大きな目的としています。島根大学から地域に情報を発信してほしいこと、地域の方々からの島根大学に関する話題、島根大学に対する要望、その他ご意見、ご質問などをお気軽にお寄せください。ご投稿お待ちしています。

投稿先
〒690-8504 松江市西川津町1060 島根大学 広報室
TEL.0852-32-6603　FAX.0852-32-6019
E-mail gad-koho@office.shimane-u.ac.jp
HP http://www.shimane-u.ac.jp

PRESENT

ご意見をいただいた皆さまの中から抽選で10名様に、島大農場で製造された「大学番茶」をプレゼントします。

※当選者のお知らせは発送をもって代えさせていただきます。
※応募締切/平成28年12月9日必着

島根大学広報誌 しまたい 2016年10月発行 編集・発行／島根大学 広報室 〒690-8504 松江市西川津町1060 TEL (0852) 32-6603 FAX (0852) 32-6019 http://www.shimane-u.ac.jp/

島根県下最大級！

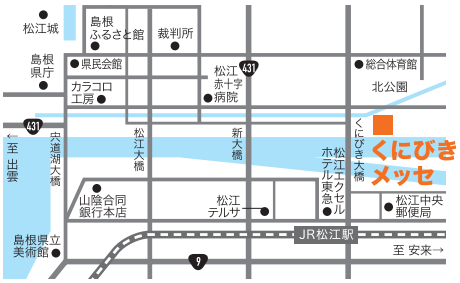
しまね大交流会 2016

未来を担う若者と
地域の人・ニーズ・シーズが
出会う大交流会

しまね大交流会実行委員会／島根大学・島根県立大学・島根県立大学短期大学部・松江工業高等専門学校・島根県

12/11（日） 13:00 START

くにびきメッセ大展示場



「しまね大交流会」は、企業、行政、NPO 等と県内の大学・高専が、枠を超えてそれぞれの魅力を発信・交流をすることを通じ、地域の良さを再発見・その活動の熱量を肌で感じる会です。大学生・高専生のキャリア教育の場としても位置づけ、若者が自らの「未来」、そして地域の「未来」を考えることにつなげるイベントとして企画しています。地域の皆様もぜひご参加ください。詳細は、COC+ホームページ（http://www.allshimane.shimane-u.ac.jp/）をご覧ください。

問合せ先 島根大学地域未来戦略センター
TEL 0852-32-9814／FAX 0852-32-9816
e-mail: lscrc@riko.shimane-u.ac.jp
●障がい等により配慮の必要な方は事前にご相談ください。

文部科学省 地（知）の拠点
オールしまねCOC+
人とともに 地域とともに 国立大学法人 島根大学